

---

# Training Box

日奈久 夕花子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Training Box

### 【Nコード】

N0356Z

### 【作者名】

日奈久 夕花子

### 【あらすじ】

ファンタジー&恋愛の掌編小説並びに短編小説置き場。ブログにて掲載した作品をこちらに整理しました。お題内は基本同一世界。ただしつながりはある場合とない場合がございます。リハビリとしての習作作品となりますので、ご了承くださいませ。また、5題という章タイトルから想像する中身と異なる場合もございますので、ご注意ください。各話のタイトルには沿うようにしております。15日まで毎日更新予定。(サイト名:「確かに恋だった」様 <http://have-a-chew.jp/> よりお題をお借り

してあげます)

## 1・賭博好きのお姫さま

フィンルディアの第二王女は、それはそれは美しい。

いまだ成人前ゆえに、結うことのないその髪は日に透けて輝き、ほつそりとした面にいたずらな目が若草の色に輝いている。

フィンルディアの第二王女は、それはそれは愛されている。

王と王妃はもちろんのこと、側妃たちの評判も悪くなく、兄弟仲も悪くない。

むしろ、両親たる王と王妃と、側妃と子である兄弟たちには溺愛されているといってもいい。

幸せで素晴らしい、フィンルディアの第二王女。

だけど。

だけどひとつだけ。

彼女は秘密を持っている。

この国の、王女の最大の秘密。

「この前の試合の結果は、どうなりました?」

傍らに控える無二の侍女に、王女の柔らかな声がかかる。

「ええ、下馬評通り……と申したいところですが、大番狂わせができましたわ」

「まあ！ では、今度も、わたくしの勝ちね」

手に持った扇で口元を隠しながら、ころころと鈴を転がすような声で笑う王女。

「……さすがですわ。姫様」

うっとり微笑む、侍女の姿。

フィノルディアの第二王女は、とても美しく愛されている。

けれど、両親も皆も、誰も知らない秘密。

彼女の個人資産が、実は途方もないものになっている、ということ。

彼女が、とても賭博好きだ、ということ。

彼女の特技は変装で、時折城下に降りては少々いかがわしい場所で、賭け事を繰り返している、とか。

その付近ではさり気に姉御と呼ばれている、とか。

誰もだあれも、知らない秘密。

「……さあ、この国での最後で最大の賭けが、もうすぐはじまるわ」  
成人の日まであと少し。

間もなく決定する嫁ぎ先を思って、扇の陰でニヤリとどこか妖艶な  
笑みをこぼす姫なのだった。

f i n

## 2・元騎士様、求職中

品行方正にして質実剛健、誠実なるものであれ。

そんなものくそつくらえ、とばかりに投げ出して、自由に生きてやるぜ！ と、騎士をやめたのはもうどのくらい前になることが。

「……若かった、なー」

断られた店先、深くため息を漏らしながら、男は項垂れた。

最初はよかった。それなりに蓄えもあったし、自由になった身が嬉しいばかりで。

飲んで遊んで、その日暮らしの日々。

軽いけがで、まあ、そりゃ、頑張れば前の通りに働けないこともなかっただろうが、これ幸いと騎士をやめて。

心配する両親には、大丈夫です、またやり直します、なんて、いい顔みせて。

しかし、時間がたつにつれて、両親は渋い顔に。

ためた金使い果たしたあたりから、仕事もしないで遊び歩く男に、周囲は厳しくなってきた。

世の中、金、かー？ 権力かー？

貧乏子爵家に、男を遊び惚けさせる余裕はなかったようだ。

「あー……仕事おちてねえかなあ」

いつそ傭兵にでも思ったが、けがのあと真面目に鍛錬しなかったために変な癖がついてしまった。

ならば力仕事か、と、思ったが、怠けた体は重くすぐに息が切れる。

若かったなあ、と、しみじみ空をみあげつつぶやいて。

のそのそと、宿へと戻る。

実家を追い出されて、日雇いの仕事で乗り切って。

……このまま、うらぶれて、俺は昔騎士だったんだぜー、なんて、よっぽらってつぶやくようになるんだろうか。

それがあまりにありありと想像できて、男はぶるりと身震いをするのだった。

f i n



### 3・王子様はノイローゼ

「……僕はなぜここにいるんだろう」

王城の豪華な執務室で、書類を片手に、一人の少年がぼんやりと窓の外を眺めながら呟いた。

少年は身なりから、身分が高いことが察せられる。それもそのはず、この国の王太子として若干15歳ながらも執務の一部を担っていた。

「ああ、鳥だ……空を飛べたら自由になれるかなあ……あはははは」  
しかし、覇気がない。茫洋と窓の外を眺め、まるで棒読みでつぶやく。

「……執務中ですよ」

傍らに控えていた侍従が、遠慮がちに声をかける。が、聞こえないのか振り向きもしない。

「ああ……遠くにいきたいなあ。海の方この新大陸にでもいきたい。もう、もういいじゃないか、もうさ、やりたいっていうなら、ぜーんぶ、譲るからさ、もう、ほっといてくれよってね」

無表情のまま、窓の外を眺めつつ、つぶやき続ける少年。

と。

がしゃーんと窓が割れて、黒ずくめの装束の男が飛び込んでいた。

「お命頂戴仕る！」

「殿下！」

そのまま襲い掛かる男に、侍従が王子を守るように飛び出し、控えていた騎士たちも臨戦態勢となる。

きん！ と、男の攻撃がはじかれ、緊迫した空気の中、騎士と男が切り結ぶ。

「あ……」

ぼつり、と。そんな中王子が声を漏らす。

「あああああもう！ そんなに俺が王太子やってんのいやなんだつたら、やめてやる！ やめてやるよちきしょー！！」

ばん！！ と、机をひっくり返しそうな勢いで、王子が叫ぶ。

「で、殿下、何を！！」

「だってそうだろうよ！ ロクに仕事を手伝うわけでもないのに王になりたいとかいいながら俺を狙ってくる弟どもも、ロクに政治のあれこれもなんもわからん上に浪費だけは激しい弟どもの母親どもも、もうもう、勝手にしろってんだ！ 好きに勝手にやればいい、俺はもう知らん。もうもう、もう知らん！ 父上が大変だからと手伝ってはいたが、その父上だって馬鹿な子ほどかわいいんだかなんだかしらんが弟どもをかばいやがるし、そのうえその馬鹿な母親た

ちも、惚れてんだかなんだかしらんが放置しやがる。この国、ぎりぎりだぞ？ 経済状態ぎりぎりなんだぞ？ それをおつまえ、仕事もしねーで金ばっか使っておいて、王位継承の儀が近いからってここまでざかざか暗殺者やら毒やら仕込まれたんじゃ、俺やってられねえって！ 国のため、民のためって思ってここまでやってきたけど、もう限界。もう無理。もう勘弁。生まれた時から命狙われてたけど、10超えてからは仕事手伝いながら頑張ってきたけど、もう、限界。俺、出てく。絶対この国でってやる！」

一気にそれだけ告げると、机の上の書類をなぎ倒し、部屋から出ていく。

「っ、で、殿下ああ?!」

足音高くその場を去る王子の姿に、室内は一瞬茫然としたが、あわてて騎士の一部と侍従が後を追う。

残されたのは騎士と相對していた暗殺者のみ。

気まずい沈黙が続く。

そつと視線を逸らした暗殺者は、静かに剣を引くと、頭をかいた。

「まあ、なんだ……うん、なんか悪かったな」

なんとも言い難い暗殺者の男の言葉に、騎士も剣を引きつつ、なんともいえない表情を返す。

「……まあ、まだ殿下も若いからな。しかし、あそこまでとは……」

殿下、ご乱心。

はたしてこの国がこれからどうなっていくのか、不安に襲われる騎士と暗殺者だった。

f i n

#### 4・民間資格の魔法使い

小さいころ、約束したの。

きっと、きっと迎えに来るって。

「リーふぁ、まっててね。きつとつよくなって、むかえにくるから遠く離れた処に引っ越していく彼を、見送るしかなかったあの頃。

いつかきつと、また会えるって。むかえに来てくれるって、信じてた。

けれど。

「……まってられなかったの、来ちゃいましたっ」

てへ、と笑いながら首をかしげて見せれば、彼は茫然と、ずれたメガネを元に戻して。

「ど、どちらさまですか？」

どうやら、10年もたったがゆえに、彼は私のことを忘れたみたい  
です。

「ひ、ひどい……っ、約束を忘れるなんてっ。むかえに来てくれる  
っていったのに！ 強い魔法使いになって、そしてむかえにきてく  
れるって！ 王都で頑張って宮廷魔術師してるってきいたから、私  
も魔法勉強しながらまっつたのに！ なかなか来てくれないから、  
ここまでいたのに！ ひどいいいいい」

「え、ええええ？ ええと、ちいさいころ？ え、あ、もしかして、  
リーファですか？ となりに住んでいた、いじめっ子の」

「え？」

「え？」

「い、いじめてないよ？ 酷い！」

「いやだって、ほら、嫌がるのに虫を押し付けたり、嫌いだってい  
ってるのにココルの実を食べさせたりしたじゃないですか」

「え、泣いて喜んでたんじゃ………？」

「そんなわけないでしょう！」

「がーん、シヨック………」

「いや、どうしてそこでシヨック受けられるのかわかりませんが  
……まあ、お久しぶりです。綺麗になりましたねえ」

「う、うわあ、王都にいつてあなたってば、女たらしになったの？  
なったの？」

「ちょ、社交辞令をそついう風にとられても」

「社交辞令って!! 最低っ」

「ああああ、とりあえず、落ち着きましょう。ここまではどうやって? 遠かったでしょうに」

不思議そうな彼に、胸を張って答えますとも。

「魔法の勉強をして、資格をとつたの。で、さつそく王都まで飛んでみました」

きやるん と、首から下げていた資格証を見せれば、驚いたように彼は瞬いて、それから食い入るように資格証を見始めます。いやん、胸元を凝視だわ。

「転移魔法ですか……?! しかもその資格証、国の発行する魔術師資格とは違うようですね。なに、『地方連合協議会認定魔術師』? なんです、これ、地方団体ですか?」

ぷるぷると首を振ります。

「なんか、民間の有志の方々が立ち上げた団体でー、なんと一日5分の練習で魔法が使えちゃう! っていう、通信教育だよー。遠見の水晶で先生のチェックもばっちり! これで私も魔法使いになれましたー」

「……え。なんですか、それ。人が魔法学園に必死で勉強して合格し、さらに学校で鍛えられ、やっとの思いで宮廷魔術師になって、そこまで来て転移魔法が使えるようになったというのに」

「え。1か月くらいで使えるようになったよ、この講座だと」  
がっくりと項垂れる彼のそばによって、肩をぽんぽん。

「まあまあ。とりあえず、今夜とめてね？」

はっと振り返った彼に、にっこり。

せつかく、資格まで取って会いにきたんだもの。

もう逃がさないんだからっ。

彼の運命を知る者は、誰もいない。

余談。

かの民間資格、実は立ち上げたも現在講師をしているのも、実力はあれども人に仕えるのメンドイとばかりに引きこもったり自由に生きてたりした超優秀な魔術師たちが、遊び半分で立ち上げたものだったとさ。

f i n



## 5・召使いは時給制

「それでは主さま、今日はここで失礼いたします」

就業時間を終えて、ふわりとお仕着せのメイド服のスカートを揺らしながら礼をする。

深く腰を折りながらも、バランスは崩さない。これって匠の技だね。

ゆっくりとそのまま体を元に戻せば、部屋の中、中央に置かれた力ウチにしどけなく腰かけた、風呂上りらしき艶やかな濡れ髪の主様先ほど届けたワインを片手に、じっとこちらをご覧になっておられます。

あらやだ、色気がただもれでしてよ？

「もう帰るのか。どうだ、一杯飲んでいかないか」

まあ素敵なご提案。主様が飲まれるワイン、とてもいいものが多いのですよね。こちらに来てから、私ったらアルコールに強くなったみたいで。おいしいお酒をおいしく飲めるようになったのよね。じゆるり、と内心はよだれぬぐいっつも、必殺メイドの微笑み！

「とんでもないことでございます。一介の侍女風情がそのようなどうかお許しくださいませ」

そそと告げてみたならば、どこかまずいものでも召し上がったようなお顔の主様。まあ、失礼な。

「今更何を言う。ならばなんだ、仕事でなければいいのか？」

「いえ、お断りいたします。仕事としてでしたら、お付き合いさせていただきますけれど」

「……どつちだ。まあいい、座れ」

「失礼いたします」

身のこなしは丁寧。ゆつくりと邪魔にならないように、カウチのそばへ。

ぼんぼん、って、そこお隣ではありませんか？ 座れと？ そこに座れと。

にやにやしないでくださいな、主様。エロおやじくさいです。いいませんけど。

しょうがないので腰をおろし。勧められるままに一杯二杯。あらおいしい。

窓の外は綺麗な月夜。これはいい月見ワイン。なんかゴロが悪いです。

静かにかけられる声に、静かにお応えして。程よく飲み終わったところ、そろそろお開き。

「しかし……かなり飲んだらうに、崩れないな、お前」

どこか悔しそうな主様。そこそこお酒がまわったのか、色づく頬に濡れた唇、あら、目まで潤んで。これはまた、美形だけに目の保養ですね。

「ええ、それが取柄でございます。では、今日はこれにて」  
礼を取って、からのデキャンタとグラスを載せたワゴンと共に、退室します。

あ、そうそう、忘れるところでした。  
出口のところでもぐるり、振り返って。

「主様、本日、6時間の残業となります。夜間でもありますので割増しで、請求させていただきますので、よろしくお願いいたしますね。それでは」

はじけるような笑顔でにっこりと。そう告げると、今度こそ、静かに礼をしながら部屋を後にしたのでした。

ふっふっふ、お給料、時給制にしていたよかった。

f i n

## 1・恋愛じっこなら余所でやりなさい

ずっと懂れていた。

それが本当の恋なのか錯覚なのか、なんて、どうでもよかった。

ただ、彼しか見えなかった。

それなのに。

「恋愛じっこなら余所でやりなさい」

深いため息と共に、じっとこちらを見つめる目は、呆れたような色で。

仕事の手を止めさせてしまった私を、どこか非難しているようだ。

「……………だって」

「でももだってありません。私は、締切前なんです。忙しいんです。遊びに付き合ってる暇はありません」

さっさと帰りなさい、と、そう短く告げられて。

そのままパソコンへと再び視線を落とす彼。

「あ……………の……………」

恐る恐るかけた声すら、もう届かないほど集中していて。

それ以上声をかけることなんか、できなくて。

しばらく、じっと見つめていたけれど、私のほうを見てくれることなんか、なくて。

悲しくて。痛くて。つらくて。

私は、そっと、部屋を後にした。

ずっと懂れていた。

それが本当の恋なのか錯覚なのか、なんて、どうでもよかった。

ただ、彼しか見えなかった。

ただ、彼しかいなかった。

幼い恋。小さなころに刷り込まれた、あこがれのお兄ちゃんは、今や作家先生。

隣同士、幼馴染。年の差はいかんともしがたいけれど、隣のおばさんがかわいがってくれたから、彼の仕事場の家事のお手伝いをする、と、高校に上がってから許可をもらった。

本人が知らなかったなんて。それこそ、私が知らなかった。

そして。

いつものように、甘えた私を。

仕事中の彼は、取り合ってくれなくて。なんだかさみしくて悔しく

て。仕事から自分に視線を向けてほしくて、つい、言葉がこぼれた。  
好きって。

いうつもり、なかったのに。  
言っただって駄目だって、わかってたはずなのに。

返された言葉は、冷たくて。どこまでも、冷たくて。  
気が付けば、ほろほろ、涙がこぼれた。

ずっと懂れていた。  
それが本当の恋かどうかなんて、どうでもよかった。  
恋愛ごっこ、だなんて。

この思いが、錯覚かどうか、なんて。  
彼にだって、断言される筋合い、ないのに。  
遊びだなんて。ごっこだなんて。そこまで言われる筋合いなんて、  
ないのに。

夕暮れの街は、紅に染まる。  
じっと、空を睨み付ける。悔しい。悔しい。悔しい。 悲しい。

長く伸びる影を眺めながら、ひとり、静かに泣いた。

## 2・子どもはもう寝る時間です

帰りたくなかった。

家にまっすぐ、帰りたくなかった。

だって、隣は彼の家。お兄ちゃんの家。

仕事場にこもることの多い彼が、いつもいるわけじゃないけれど。なんだか、家に帰りたくなかった。

放課後。

昨日まではクラスメイトと、あちこちに出かけたり、友達の家にお泊り会したりして。

高校までずっと一緒だった友人たちは、その親とも仲良しだったりするから、結構気軽に家にちゃんと連絡さえすればお泊り可だったり、連絡入れればある程度遅くまでオツケー、だったりして。

夜遊び、ってほどじゃないけれど、いつもより帰りが遅くなった。

お母さんは心配してはいたけれど、お兄ちゃんのところから帰ってから変だ、ってわかってたみたいで、何も聞かないでくれた。お父さんにもなんとかごまかしてくれてるみたいで。正直、知られてるって怖さはあつたけど、でも、ありがたかった。

さすがに今日は、友達たちも用事があるようで、ひとりぼっち。

今までなら、泊まらないまでも、友達とワイワイ過ごすことで気持ち紛れるし、そのまま帰宅すればその気持ちを継続できるし、で、なんとかのりきってきたけど。

ぼつん、と、一人になると、余計なことを考えてしまう。

嫌われた、という気持ちとか。お兄ちゃんがそんなことで嫌うはずない、という願望とか。年が離れた人を、なぜあんなに好きになつたのかな、とか。もう、会えないかな、とか。会えないのか、会いたいのか、会いたくないのか。ぐるぐる回る気持ちは複雑で、なかなかこたえがでてこない。考えすぎて熱が出そう。ため息を漏らしながら、それでもまっすぐ帰る気持ちになれなくて、公園へ足を向けた。

小学生たちがきゃいきゃいと遊ぶ公園。昔、私もお兄ちゃんに遊んでもらったなあ、なんて、思い出す。

よほど小さい時から、私はお兄ちゃんが、彼が好きだったみたいで、足元がおぼつかない時から見つけると駆け寄るような子供だったらしい。おぼろげな記憶の中でも、まだ幼児の私が小学校高学年だから中学生だかのお兄ちゃんに駆け寄っては、遊んでもらおうとしている場面が浮かぶ。

……考えたら、すごい迷惑な子だったんだね、と。

今更ながらに気が付いて、恥ずかしくて身悶えしてしまふ。

でも。 それでも、好きなんだよなあ。

なんで、と言われても困るけれど。

そんな風に迷惑な子供だったし、時々、めんどくさそうに困ったように、したけれど。

……遊んでくれたんだよな、子供と。ほっとけよー、なんていう同級生の言葉に、ごめんな、なんてこたえて。つまらなかつたらうに幼児である私の相手を、しょうがないなあなんて顔で笑いながらしてくれて。



甘やかされてた。構ってもらってた。

それが当然、と、思ってしまうようになるくらいに。

ため息が漏れる。あーあ。自業自得とはいえ、つらいなあ。もう少し、もう少し、大人になつてから、いうつもりだったのに。好きです、って。だから頑張つてここまで立派になりました、って。あーあ。

夕暮れの公園は、日が落ちて、子供の数も減っていく。少し肌寒い気がしてふるり、と、体を震わせたら。

近くで、呆れたようなため息が聞こえた。

ばっ、とそちらを見れば、彼の姿。え。なんで？ どうして？ と軽くベンチでプチパニックを起こしていると、少しばかり呆れたような声で、彼が言う。

「何をしてるんですか。バカ娘。遅くまでこんなところで。夜遊びのつもりですか」

「え………なんで？」

「なんで、も、ないでしょう。連絡してないんじゃないですか？いつもの時間に連絡がないのに帰ってこない、と、おばさん心配してましたよ。まったく………どこにいるのかとおもったら」

言われてみれば、今日はそこまで遅くなるつもりはなかったの、連絡はしてなかった。あわてて携帯を取り出して時間を確認。うわ、19時過ぎてる。まだ19時、ともいえるけど、私にしてみれば連

絡なしで帰らない時間ではない。

さらに、着信が複数。確認すれば母と……そして、彼からの、着信。視線を挙げれば、ふう、と、深くため息をついた彼。よく見れば少し汗ばんでるような気がする。探してくれたの？ 私のこと、うっとおしかったんじゃないの？ それでも、探してくれたんだ。

「う、めんなさ……」

「全くです。この公園、遅くなると変質者出るって知ってるでしょう。さあ、帰りますよ」

ぐい、と腕をつかまれて、立ち上がられる。ぐいぐい。引っ張られるように公園を出る。強い力。でも、転ばないように気を付けてくれる。昔からこうだった。強くて強引なようで、優しい。

優しくされたら、諦めきれないよ。

目に涙がたまっていく。何かの拍子にこぼれそうになりながら、家の前について。

「まったく。文筆家なんですからね、運動なんてできないもやしなんでしょうか……ら……」

ぼやきながら振り返った彼が、言葉に詰まる。

ああ、涙。隠せなかった。

ぽろり、と、一滴。ほほを伝ってこぼれていって。

沈黙。何も言えなくて。ただ二人で立ち尽くして。

どうしよう、と、思っていたら、視界に指が見えた。彼の手。少しごつごつして、ペンだこのある手。それが、すっと私のほうに伸びてきて。こぼれた涙を救うように、そっとほほと目じりをなぞるように。

触れる、熱。

驚いて目を見張れば、はっ、と我に返ったように彼の手が戻される。

なに。いったいなに？

「っ。子どもはもう寝る時間です。さっさと帰りなさい」

そういうと、軽く私の背を押して、家のほうに進ませる。

え、どういうこと？ そのままふらふらと玄関の前まで進んで。扉に手をかけたところで、振り返ったら。

もう、彼はいなくて。

混乱。困惑。パニック。

20時じゃ、さすがに、寝るにも早い気がするよ、お兄ちゃん。

私は、ちょうど玄関の物音にきづいて出てきた母に声をかけられるまで、そこに立ち尽くしていた。

### 3・あなたの気持ちはよくわかりました

それから。

不思議なもので、会おうとしなければ、私と彼はこれっぽっちも接点がなかった。

ちょうど仕事が詰まっていたのか、実家へ戻ってくるのが少ない彼と、日中は学校の私。

今までなら、会いたくて会いたくて、できるだけ口実を設けて隣に行ったり届け物をしたりと、していたけれど。

それをしなくなった途端、彼と会うことはほとんど、全くと言っていいほど、なくなった。

ちらり、と見かけることがないわけじゃなかったけれど、忙しそうな彼に私から声をかけるなんて、できるわけがなかった。

1週間、2週間。時間が過ぎていく。

会いたいな、という気持ちが湧き上がる反面、彼の冷たい言葉や迷惑かもしれないという思いがストップをかける。

不自然に遅く帰るのをやめたにもかかわらず、これほどまでに彼に会わないということは、彼が会いたくないと思ってる証拠のようにすら思えて。そうしたら、余計身動きできなくなった。

「馬鹿だねえ」

公園で、友達と二人。目の前でカフェオレを音を立てて飲んだ彼女は、ちらりとこちらをみる。

「馬鹿だつてわかつてるよ」

「いいやわかつてないね」

手の中のパックをのむ気に慣れずに、右に左にと手遊びしつづつむけば、彼女のため息。

「ってかき、いい加減ほかの男にも目を向けなつて」

「……そうはいつても、ねえ」

「あんた、ガード固いんだよ。気になつてるやつ、いないわけじゃないんだ。もっと気楽にいきなよ」

ぶらぶらとベンチから降ろした足を揺らす彼女の、短いスカートが翻る。

少しだけ奔放な彼女。だけど、その言動や外見に比べて、彼女こそガードが堅いのを私は知つてる。

その彼女に、こうもいわれるとは。……少し考えたほうがいいんだろうか。

「んー……考えてみるよ。なんか、うん」

「そうしな」

軽く返して、彼女が笑う。美人だと思う。派手目の美人。だけど、笑うとかわいらしい。

……彼女みたいに大人っぽい外見だったら、もう少し彼は、私を見てくれたらどうか。

そんな埒もないことを考えて、また、ため息を漏らした。

「ただいまー……」

扉を開ければ、ふわりといいにおいが漂っていた。

ぐう、と、現金なおながなる。思わずぺちりと一度おなかをたたいてから、ダイニングへと向かう。

「あら、お帰りなさい」

ばたばたと台所で料理をしていたらしき母が、振り返って笑う。

「ただいまー。あー、おなかすいた。ねえ、ごはんすぐ？」

鍋を覗き込みながら言えば、呆れたようにぺちりと頭をたたかれて。

「ええ、すぐできるから着替えてらっしゃい。ちゃんと手も洗うのよ」

まるで小さな子供に言うように、くすくすと笑いを含めていう母にはーい、と、わざと幼い返事を返して。

ダイニングを出ると、二階の部屋へ。制服を脱ぎながら、ふと窓の外をみれば、隣の家がみえる。庭と、家。そして、あの、見えそうで見えないぎりぎりの場所にある窓が、彼の、お兄ちゃんの部屋。カーテンが閉まったままの様子に、相変わらず忙しいんだろつな、と、思っ苦笑する。

結局、彼のことを考えてしまつらしい。

本気で、新しい恋を探したほうがいいのか、なんて。そんな風に思った。

「あ、いいところに。これ、お隣にもって行って」

着替え終えて下に行けば、鍋と回覧板を用意した母がにっこり笑う。

「えー……おなかすいたのに」

「さっさと行く。早く戻ってらっしゃいよ」

「はい」

しゅしゅと、それらを持って家を出る。

窓もしまつてたし、カーテンもしまつてたから不在のはず。おばさんに渡してさっさと帰ろう、と、隣の家チャイムを押せば。

「はい」

「おばさん、回覧板とおすそ分け持つて来たー」

「はいはい、ちょっとまつてねー」

インターホンから明るい声。つられるように笑顔になる。

しばし待てば、足音。……おばさんにしては焦つたような？ 少し首をかしげていれば、ばたん！ と大きな音がして、玄関があいた。

「あ……」

「……久しぶりですね」

彼、だった。どこか焦ったような様子で、扉を開けた彼。まさかいるとは思あなかつたので少し焦る。

「あ、あの、これ。かーさんから。おすそ分けとあと、回覧板！」

ぐい、と、勢いのままに渡して。

「じ、じゃあ。おじゃましました！」

「あ、待ってください」

くるり、と踵を返そうとしたら、引き止められて。

余計にあせる。

「あ、あの、その。うん、今まで迷惑かけてごめんなさい。お兄ちゃん忙しいのに、なんか邪魔ばっかで。うん、だいじょうぶ、私は平気だし、うん。あ、友達にいわれたんだ、新しい恋でもしたらって。がんばってみようかなーっておもうんだ！ だから、うん。いままでありがとうね、お兄ちゃん！」

焦って。言わなくていいことまで、言ったかも、って。気づいたけど。出てしまった言葉は、戻せなくて。

振り返ることもできないまま、立ち尽くしていれば。それまでずっと沈黙していた彼が、深く長い、重たいため息をひとつ、漏らして。



「あなたの気持ちは、よくわかりました。引き止めて済みませ  
ん。おばさんにお礼いっておいってくださいね」

そういうと、しばらくして、ぱたんと玄関の閉じる音。

……ああ。

そのまま、どこか茫然とした足取りで、家まで帰る。

「ただいまー……」

「おかえりな……っ、ちょっと、どうしたの!??」

リビングに入れば、母が焦ったように駆け寄ってきて。

「え、なに?」

「なに、って。……あなた、気づいてないの?」

どこか痛そうな表情で、そっとほほに触れる母の手。

あ。私、泣いてたんだ。

「……っー」

ごじごじと、目元をぬぐえば。それ以上何も聞かずに。

「さ。ご飯にしましょ。今日はパパも遅いし、二人で食べるわよ。  
あったかいのおなか一杯、食べなさい」

そう、そっと肩を押して、テーブルに促してくれた。

晩御飯は、ちょっとだけ、塩味が効きすぎてる気が、した。

#### 4・背伸びをするのはやめなさい

「じ、じゃあ、お試しってことで」

目の前で照れたように笑う人に、頷いた。

どこかぎこちない私の笑顔に、隣に付き添っていた親友が、ばん！と背中をたたく。

「いったあ……」

涙目になりながら背中を抑えれば、にやにや笑う親友。

「ま、気楽にいきなよ。な、彼氏候補君も、そうおもつたる」

「あ、ええ。僕としては、お試しでも付き合ってもらえるだけラッキーっていうか！」

真つ赤な顔で、綿綿と言い募る少年に、思わず顔がほころぶ。

うん、大丈夫な気がする。お試しだけど。この子となら、やっていけそう。

ちらりと浮かんだ面影は、見ないふりしてぎゅっと胸の奥で握りつぶした。

つまり、何がどうなったかというと。

あまりにどんよりしていた私の様子に、クールなようで人情家な親

友は、さあはけ、とばかりに問い詰めてきて。答えないわけにもいかないというか……たぶん、私自身が話たかつたんだと思う。お兄ちゃんとの会話を、話して。呆れたようにため息をつく親友が、ならば、と、提案したのが。

実際に、お試しおつきあいを試してみましよう大作戦。

長いよ、と突っ込んだら、でこピンされた。ひどい。

まあ、実際お試したいといっても、相手がいなきゃどうしようもないよという私に、親友はにやりと笑って。実は紹介してくれっというの、数件あつたんだよねー、と、語尾をハートにはねさせながら、告げてくれた。

驚く私の状態もなんのその、その数名の名前を挙げ、そのうえでお勧め、という少年にその場で電話。お試しおつきあい、という条件に了承を得て。

そしてその日の放課後にご対面。冒頭に戻るわけで。

そんなわけで、生まれて16年。初めて彼氏ができました。仮だけどね。

で、どうしたらいいのかわからない私は、とりあえず、少年と一緒に帰宅することになって。朝も、路線は違うけれど駅で合流できそうだと少年がいうので、そうすることになって。ただ、慣れないからどうしていいかわからなくて、無言のままもくもくと二人で歩いて。いや、少年は最初一生懸命話しかけようとしてくれたんだけど、も、私がつまり返せなかつたっていうか。しょうがないけれど、そんな風な状態で。あれー、私ってこんなに人見知りだったかなあ、

なんて、疑問に思いながらも、一応こう、たまには一緒にお昼を食べたりとか、放課後ちよつとだけ寄り道したりとか。そんな風に彼氏彼女つぼく、それつぼく、過ごしてはいたのだけれど。

……違和感、というか。隣を見て、たまに話が弾んで、顔を見たら、少年で。その瞬間に違う、なんて思ってしまう自分がいて。そのままた黙ってしまう私に、少年は心配してくれるけれど、ごまかすしかできなくて。

少年は、たぶん、本当に私のことを好きでいてくれるんだなって。会話の合間の照れたような仕草やら、声やら、時々たぶん手をつなぎたいのかなって感じで動く手から、感じられて。

少年のことを好きになれたら、最高に幸せになれるんだろうな、なんて。思うのに。

手をつなぐととされたのを、思わず、静かに避けてしまったり。触れようとする手の温もりが怖くて、体を引いてしまったり。

……そんなことを繰り返して、次第に気まづくなり始めた、頃。

「デートしましょう」

そう少年がいうから。思いつめた表情で、まっすぐにいうから。潮時なのかな、と、頷いた。

日曜日。

近くの繁華街で待ち合わせて。二人で、映画を見て。食事でもしようか、と、街を歩いて。

「……おや」

よく知った声が聞こえて、びっくり、と、体が震えた。彼だ。間違っ  
はずがない。こわばった私に、不思議そうに彼は近づいてきて  
隣の少年に気づいて。

ぺこり、と会釈する彼に、少年も、訝しそうに会釈を返して。

沈黙。そして。

「…………デート、ですか」

ぽつん、と、聞こえた声に、はっと顔を上げると、じつとこちらを  
見つめる彼の眼があつて。

答えられなくて、どうしよう、って思ってた。ぐ、っと、腕を  
引かれて。少年がいたんだ、って、振り返ると、どこか真っ直ぐな  
強い目で、彼を睨むようにみる、少年の姿。

「デートです。失礼します」

ぺこり、と、再び少年は頭を下げると、私を引っ張るように歩き始  
めて。

「あ、え、ちよ。う、おにいちゃ、またね」

それだけを彼に告げて、引かれるままに少年と共にその場を後にし  
た。

ずんずん、ずんずん。少年は足を止めることなく進む。ついて行く  
のに必死で息が上がる。やがて少年は、小さな公園へ着くと、やっ  
と私を振り返って。はっ、と我に返ったように手を放すと、申し訳  
なさそうに眉を下げた。

「ごめん。……勝手なことして」

何も言えずに、首を振る。息が苦しい。

「あの人が、好きなんだね」

はじかれるように顔を上げれば、切なそうな痛そうな表情の少年。

「う、ごめんなさい。ごめんなさい……っ」

「謝るな！」

大きな声にびくり、と、震える。おびえに気づいて少年は、昂ぶりを抑えるように息をついて。

「……忘れるため、だったんだね。ねえ、僕じゃ、だめ？」

じっと見つめながら。切ない、痛むような目を、向けながら、彼は静かに、静かに言葉を紡いだ。

こたえなんて、ひとつしか、持ってなかった。

とぼとぼと、家路をたどる。

夕暮れの街は、朱色に染まって。周りの人は忙しそうに歩いている。とぼとぼ、とぼとぼ、と、うつむいて歩いていると、ふと、足元に影が見えた。

視線をす、つとあげれば、目の前に彼。無言で、じっとこちらをみ

ている。

「おにい、ちゃ」

「何をされたんですか？」

「え……？」

「何かされたんじゃないんですか？        そんな、今にも泣きそう  
な顔して」

すっと伸ばされた手。近づく手。そのままゆっくりと目じりに触れる指。一度目を閉ざして。開けば。

彼が、かなり近くにいて。ときん、と、心臓が高鳴った。  
いけない。いけない。期待させないで。

「べ、別に。だ、大丈夫だよ。何も無いもの」

す、っと、一步下がる。これが私とお兄ちゃんの距離。近すぎちゃ  
いけない。近づけない年齢の距離。

笑え。笑うんだ。

「ちょっと、喧嘩しただけだよ。付き合ってるんだから、そんなこ  
ともあるよね」

ごめんね、って。謝ったんだ。また。  
もう無理だ、って。ごめんね、って。

しょうがない、って、笑ってくれたんだ。



でもあきらめないよって。

「だ、だから、大丈夫よ。もう、お兄ちゃんは心配性だなあ。私ももう高校生だよー」

くすくす、笑って。そう告げたら。

気が付けば、抱きすくめられていた。暖かい腕の中に、包まれていた。

お兄ちゃんのおい。彼の、温もり。ぐらり、と揺らぐ心に、一瞬茫然と仕掛けて、あわててそこから抜け出そうとして。

「……背伸びをするのはやめなさい。そんな顔して。ごまかせると思っんじゃないありませんよ」

柔らかな、声が、耳元で聞こえて。

私は、身動きすら、できなくなった。

## 5 ・ 今後に期待、しています

ずっと懂れていた。

それが本当の恋なのか錯覚なのか、なんて、どうでもよかった。

ただ、彼しか見えなかった。

ずっと、ずっと。

ただ彼だけを、見つめ続けてきた。

ただ、それだけだった。

心臓が、破裂しそうだ。

回された腕から伝わってくる温もり、とか。  
頬に触れる胸元の堅さ、だとか。

ふわりとかおる、彼の香り、だとか。

くらくらとめまいがする。呼吸がおぼつかない。幸せで、嬉しくて  
うれしくて 悲しくて。

このままじゃいけない、と、ぐっと体を離そうとした。

けれど。

逆に強く抱きしめられて、私はただ混乱する。どうして？ どうして？  
なんで？

ゆらゆら、ぐらぐら、心が期待する。ダメだってわかってても、でも、期待してしまっ。

酷い。ひどいよ、お兄ちゃん。

あまりに苦しくて、ぼろり、と、涙が零れ落ちた。

「……っ、ないて、るんですか」

鼻を小さくすすった音に気付いたのが、戸惑うように声が聞こえて、少し腕が緩む。

その隙に少しだけ離れて、覗き込んで来ようとする彼の顔を避けるように、顔をうつむける。

「なかないで、ください」

再び伸ばされる手。思わず後ずされば、息をのむ音がして。

ひっく、と、一つ、呼吸代わりに泣いてから。

「ひどいよ、おにいちゃん……」

声は、酷くかすれていた。湧き上がる想いと悲しさと、ずきずきする胸が、つらくて哀しくて。我慢できなくて。私は叫んでいた。

「ひどいよ、どうして、どうして、優しくするのよ。恋愛じつじつで、子供って……いったじゃない！ 私なんか、邪魔なんでしょう？！ だったら、優しくしないでよ！ 構わないでよ、お兄ちゃん、お兄ちゃんの……っ、ばかぁ！ お兄ちゃんなんて、だいき…

…っ  
「っ」

最後まで言えなかった。再び、私は暖かな腕の中にさらわれていて、強く強く、抱きしめられて、息が詰まる。

どうして、どうして。それしか言葉が浮かばない。ぐるぐるぐるぐる、嬉しい幸せと悲しいと、もう、感情がごちゃ混ぜで、どうしていいかわからなくて。ぎゅ、と、お兄ちゃんのシャツの胸元をつかむ。

「……すみません」

抱きしめる手は緩まないまま、耳元で声が聞こえる。吐息。震える声。くすぐったくて身をよじれば、しつかりとホールドしたまま、しかし顔を見られるくらいに余裕が生まれる。深呼吸。苦しかった。ふわり、とお兄ちゃんの香り。ずきんと胸が痛む。苦しくて、顔があげられない。

「なにを、あやまつてるの。離して、もう、迷惑かけない、から」

震える唇を叱咤して、必死で言葉を紡ぐ。

「違うんです。あんないい方して……すみません」

声には、苦渋があふれていて。苦しそうで。はじかれるように顔を上げれば、悲壮な表情をした、彼の顔がそこにあって。

「ちがう、って……」

茫然と見上げれば、深くため息をつく彼。そして、彼はギュッと強

く目を閉ざす。

「……今、何歳ですか」

「え……と、16、だけど」

今更なにを、と、首をかしげる。とたん、瞼を開いた彼は、強く眉を寄せて。

「そう、あなたはまだ16なんですよ。　まだ、いろいろと、大人としては、対応に困る年齢なのです」

ぼかん、と、してしまう。

「え、でも、結婚できる年だよ」

「確かに、法律上はそうですね。しかし、条例上だと……その視線がすい、と、そらされる。

青少年保護条例、だったっけ？　うる覚えのその文字がぼん、と、浮かぶ。

何がいたいんだろう、わからなくて、じっと見つめれば。

うるうるやさまよわせていた視線が、やがて諦めたようにこちらに定められて。

「つまり、あと2年。せめて高校卒業するまで、と、思っていたのですよ」

「…………え？」

「小さいころから、まっすぐ自分に向かってきてくれる子がいて、その子が次第に女らしく成長していく。それに魅了されない男がいると思えますか？　ずっと、まっすぐに向けられる感情がくすぐったくて心地よくて、愛しくて　だけど、だからこそ、いい加減なことをしたくなかった」

なに。何をいつてるの？　彼が言ってる言葉は、わかるのに、理解できない。

頭が真っ白で、茫然と見返してしまふ。

「せめて、高校を卒業してから。それから、一緒に、はぐくんδειければ、と、思っていたんですよ。ゆっくりと、大切に、心と、思いを。大切だから、愛しいから、ずっと、ずっと、そう、思っていたっていうのに」

「…………お、にいちゃ、ん」

ふう、と、彼はため息をついて。それから、私の大好きな笑顔を浮かべて。

「好きですよ。大好きです。　だから、誰にも触れさせないで。僕のものでいてください」

ゆっくりと、大好きなお兄ちゃんの大きな手が、髪を撫でる。茫然とした私の頭に、言葉がじわ、じわとしみこんでくる。ゆっくりと、顔が熱くなってくる。うそ、うそだ。でも、目の前で彼が優しく微笑んでいて。その目が、とろりと甘い熱をはらんで、いて。

「……すき」

零れ落ちた言葉に、彼の顔がさらに笑顔になって。

嬉しくて、嬉しくて。

気が付けば、私は、大きな声でなっていた。

小さな小さな子供のよう。彼に遊んでもらっていた、小さなころのよう。

彼は、ただ、静かに、静かに、抱きしめて撫でてくれていた。

「……相変わらずの、泣き虫、ですね」

落ち着いた私に、彼がいう。

「そ、そんなことないもん。泣かせたのお兄ちゃんだし！ それに普段めつたに泣かないし！」

「そうなんですか？ でも、僕はいつも泣いてるところを見る気がしますよ」

「き、気のせいだし！」

「それから……」

「な、何？」

「お兄ちゃん、は、いい加減なしにしませんか？」

「っ、な、な？」

「名前で呼んでください。ね？」

「あ、う……鋭意努力します！」

くすくすと、笑って。彼は。

「今後に期待、しています」

そっと、耳元に囁いた。

ずっと憧れていた。

それが本当の恋なのか錯覚なのか、なんて、どうでもよかった。

ただ、彼しか見えなかった。

だから。

恋かどうかなんて、関係ない。

そこにあるのは、きっと、愛なのだから。

F・i・n



## 1・誰にでもスキだらけ

真っ直ぐに向けられる感情が、嬉しくなかったわけじゃない。愛しくて、恋しくて。誰よりも大切だからこそ。簡単に言葉になんて、できるわけがなかった。

「おにいちゃん、だいすき！」

はじけるような笑顔で、告げられるたび、誇らしくてうれしくて照れくさくて。

ただただ無邪気でいられたのは、幼いころだけ。思春期になれば、感情は複雑に揺らいで。愛しいけれど、大切だけれど 真っ直ぐな感情が、どこか煩わしくて。

どこかつっけんどんな対応になっていたその時代ですら、彼女はまっすぐに、ただひたすらに、こちらを見ていてくれた。

それが恋なのか、ただの家族愛なのか、なんて。きつと答えは、まだわからない。

中学、高校、大学、と。

別に彼女がいなかったわけではなかった。それなりの付き合いもしたし、それなりの相手もいた。

ずっと、彼女を見ていたわけじゃない。ずっと、彼女を思っていたわけじゃない。

けれど。

気がつけば、まっすぐに向けられるその視線を、探していた。

腹をくくるまでに、時間がかかったのは、自分だけの秘密。

大学時代に、運よく賞を受賞できて、卒業するころにはありがたいことに作家一本で食べていけるようになっていて。実家とは別に部屋を借り、そこで作業することが増えて。

時折帰宅した実家以外で、彼女に会うことが少なくなったとき、ちよつと彼女が受験だと知った。

高校受験。年の差を如実に実感して、苦笑ったそんな思い出。

そして。

「おばさんに、許可貰ったんだ！」

幼いころと変わらない、まっすぐな思慕を浮かべ、はじける笑顔の少女が、目の前に、いる。

仕事場のマンション。ある意味一人暮らしの男の部屋へ。

幼いころと変わらぬ笑顔でありながら、その姿はすでに羽化を遂げたかのようで。そう。たとえるならば、花開く寸前のつぼみ。みずみずしさと若々しさをたたえながらも、どこかしつとりと艶を帯びる。

いつのまにか、成長していた彼女の姿に、戸惑う。

仕事に集中しなければ、と、画面には向かうものの、わかっているのか甘えてくる彼女に、心が、体が揺らぐ。

学校帰りなのか、ブレザーの制服姿のまま、短いスカートを揺らし、無邪気に構ってくれと甘える彼女。

それに不埒な思いを抱かない男がいることに、気づかない、なんて。

苛立ちが、起こる。

そんな風に、他の男にも甘えるのだろうか。そんな短いスカートで、学校へ通っているというのか。

その笑顔を、周りの誰にでも見せているのだろうか。 そんなにすきだらけ、なのだろうか。

このまま、押し倒すことだって、できるといつのじ。

浮かぶのは不埒な思いばかり。軽く頭を振っていれば、彼女が、その言葉を口にした。

「……好き」

まっすぐに彼女を見つめる。

これ以上は、耐えられない。これ以上は、無理に決まっている。

「恋愛ごっこなら余所でやりなさい」

深いため息と共に、そう告げれば、凍りついたように顔をこわばらせる彼女。

ああ。そんな顔をさせたいわけじゃないのに。

けれど、このままだと、彼女を傷つけてしまいかねない。

「……だって」

「でももだつてもありません。私は、締切前なんです。忙しいんです。遊びに付き合つてる暇はありません」

さっさと帰りなさい、と、そう短く告げて。意識を彼女から引きはがす様に画面に向かう。

「あ……の……」

かけられる声にこたえなくなるけれど、答えられない。ぎりぎり引き絞つた理性の糸は、はじけ飛ばんばかりに張りつめているのだから。

しばらく、じつと見つめる視線を感じていたけれど、やがて諦めたように部屋を出ていく彼女。

ぱたん、と、玄関のしまる音が聞こえて、体からやっと力が抜ける。

あんなこと、言いたくはなかった。

抱きしめて、囁いて、口づけて。とろけるほどに、愛したかった。

けれど、彼女は、まだ幼いのだ。

15歳。もうすぐ16だろうか。

歳の差はいくつになるだろう。      ロリコン、と、呼ばれないぎりぎりラインだろうか。

花開く寸前の彼女の色香に、惑わされている自分に、呆れてしまう。

もし、その思いのままにぶつかれば、彼女はきっと今以上に傷つく

に違いない。

ならば。

待つしか、ないのだ。

あと、少し。せめて高校を卒業するまで。

彼女が、本当の意味で花開く日まで。

「これは、かなりきついですね……」

漏れるのは、ただ深いため息ばかりだった。

真っ直ぐに向けられる感情が、嬉しくなかつたわけじゃない。  
愛しくて、恋しくて。誰よりも大切だからこそ。

身動き取れない、時もあるのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0356z/>

---

Training Box

2011年12月11日10時51分発行